

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



冬〈C〉

樹がねじくれ、
道の背ぼねが白い。
いっても、いっても、
鳥の死がいや
茶わんのかけら。

風がびゅうびゅうと
ふきならし、
まんとをまとい、
手ぶくろをはめても
さむい。

ああ、またこんな
こころの季節になった。

冬〈B〉

こころの旅のいや果に
あわれ触れくる薄陽よ
自ずからなる唄もたえ
野末を冬のこえばかり

山本幸奈

イラストレーター

neon-keeper193.cc@docomo.ne.jp

図書館で働きながら、ペンで
線画を描いています。
見えないものを大切に、ちょっと奇
妙な世界をお届けしたいです。

絵について

淋しい冬の中、彼は言葉を抱かずには
いらなかったのだろつと思います。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県
知多郡半田町(現・半田
市)に生まれる。幼くして母
を亡くし、養子に出される
など寂しい子ども時代を
送る。旧制半田中学校卒業
後、「赤い鳥」入選を契機に
北原白秋や巽聖歌の知遇
を得る。昭和18年、結核の
ため29才で世を去る。

解説

ねじれた樹を背景にどこまでも続く乾きさ
つた白い背骨のような道。そして流れを失った
はだかの河底。これらは死者の白骨を連想さ
せはしないだろうか。そのはだかの河底には
黒い鳥の死がいや、茶わんのかけら
がころがっている。何という荒涼たる風景だろ
う。人の人生を幼年期から晩年にかけて春、

夏、秋、冬の四季に分けるとすれば、ここに取り
上げた作品〈B〉と〈C〉は、まさに南吉の
冬に当たるといいだろう。この2作品が書
かれたのは26歳。一般的に26歳という年齢
は、まだ青春時代のはずだが、29歳と7ヶ月で
逝った南吉にとっては、もう晩年の冬だったの
だろう。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小
中学校勤務を経て'04年から'11
年まで新美南吉記念館館長を
勤める。著書「南吉の詩が語る
世界」(一粒社出版部)「子ども
たちに贈りたい詩」(教育出版
センター)「新しい詩の創作指
導」(共著・明治図書)ほか。